

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院学生研究
2018年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	英米文学	専攻
研究代表者 (2019年3月現在のもの記入)	在籍課程・学年・学生番号		氏名		
	<input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 2年 17JB002H <input type="checkbox"/> 博士後期課程 年		諸岡友真 印		
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学研究科・教授		新田啓子 印		
自然・人文・社会の別	自然	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/> 人文	<input type="checkbox"/>	社会
個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人		<input type="checkbox"/> 共同名		
研究課題	James Baldwin, <i>Another Country</i> における人物関係の研究—ブルースを手がかりに				
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2019年3月現在のもの記入	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名		
	文学研究科・英米文学専攻 博士課程前期課程二年		諸岡友真		
研究期間	2018 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 199,107円 / (採択金額) 200,000円				

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、James Baldwin の小説 *Another Country* に描かれる複雑なキャラクター関係を分析することで、そこで生じている問題の様相を明らかにし、その問題に対して Baldwin がどのような解決策を示しているのか明らかにすることである。白人と黒人キャラクター両方とも、奴隷制とリンチの歴史の中で白人によって構築されてきた黒人の性に関する神話に憑りつかれることによって、死に至ったり、精神的な病に罹ったりすることとなる。こうした差別や暴力、道徳の退廃が蔓延するアメリカ社会の中で生きていくために、キャラクターたちは他者と愛情関係を結ぶことになるが、本研究では、特に白人男性 Vivaldo と黒人女性 Ida との異人種間の愛と、Vivaldo と Eric との同性愛に注目し、何が愛を防ぎ、逆に何が愛を可能にさせているのか探った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 異人種間の愛 } { 黒人の性に関する神話 } { 同性愛 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

公民権運動などの社会的混乱の最中に執筆された James Baldwin の三番目の小説 *Another Country* (1962) は、出版当初から現在に至るまで未だに評価が分かれている状態にある。この作品に関して、しばしばなされる批判は、テキストの描き出す万華鏡のように多種多様で、変幻自在なキャラクター関係において生じる問題に対して、Baldwin が何の解決の道筋も示していないというものである。これは作家の Charles Newman によって最初になされ、それから数十年経った Kevin Ohi の批評の中でも確認することが出来る。Ohi は、キャラクターの欲望やテキスト前半で自殺をする黒人男性 Rufus の死は、言語表象そのものを拒む秘密として描かれており、そのためにキャラクターは自身の欲望も Rufus の死も超越できないと結論付けている。つまり、キャラクターの抱える欲望や Rufus の死は解読不可能な秘密であるということは、それらが解決されないままテキストが終わることとなる。したがって、Ohi は言語の表象能力という視点からではあるが、結局のところ Newman の批判を繰り返すこととなっている。また、Ohi の解釈は、キャラクターが自身の欲望やルーファスの死と向き合うことが困難な原因を言語の問題に帰することで、その裏にある歴史的、精神的な問題を覆い隠すこととなっている。また、キャラクターの自己認識の可能性も閉ざしている。従って、本研究では Rufus の死と、彼の親友であった白人男性の Vivaldo の抱える秘密を、アメリカの歴史的な背景から分析することで問題の様相を明らかにし、Baldwin がどのように人物関係における問題を乗り越えようとしているのか探っていく。

Another Country は、飢えと寒さに苦しむ Rufus が深夜のニューヨークを一人で彷徨う場面から始まり、彼の記憶の断片的なフラッシュバックによって徐々に彼がなぜこのような状態に至ったのか明らかにされていく仕組みになっている。真っ先に思い出されるのが南部出身の白人女性 Leona のことである。そして、テキストは二人の出会いからその破滅までを描いていくこととなる。二人の出会いと別れの両方の原因となっているのが、アメリカにおける黒人のリンチと去勢の歴史と、その裏にある白人男性の抑圧された罪責感と恐怖である。奴隷制時代から黒人女性を性的に搾取してきたことによる罪の意識を持つ白人男性は、黒人男性が復讐として全く同じことをしてくることを恐れ、黒人男性と白人女性とが関係を持つことをタブーにし、それを破った黒人たちをリンチし、去勢してきたのである。その際、白人男性は黒人男性の性に関する言説を作り出したのであった。つまり、黒人男性は獰猛で、非文明的なレイピストであり、白人女性に対して異常なまでの欲望を抱き、彼女たちの純粋性を犯そうとしているという言説である。こうした黒人男性像を作り出すことで、白人男性は女性たちを守るという名目によってリンチや去勢をすることを正当化してきたのであった。Rufus と Leona の関係性は、初めから終わりまで、こうしたアメリカの歴史に取り囲まれることとなる。二人は初めて会った夜に性的な接触を経験するが、その際に Rufus は黒人レイピストという役を自ら演じ、Leona も彼との強引なセックスを心のどこかで求めていたかのような態度を示す。しかし、二人の出会いがこのようであったため、Rufus は彼女が彼の事を一人の人間ではなく黒人男性として愛しているのだと次第に思い込むようになる。また、二人を取り囲む白人男性たちの眼差しも二人の関係を破壊する原因となっている。彼らは Rufus をレイピストとして憎しみのこもった眼差しで見ただけではなく、そうした彼と付き合っている Leona のことまでも誰とでも関係を持つ売春婦として見る。そうした白人男性の視点を内面化した Rufus は、白人から殺されるのではという恐怖に震え、Leona は自分以外の複数の黒人男性とも浮気をしているという疑心に蝕まれ、ついにはそれへの防御とでも言わなければ、彼女に暴力を振るうようになっていくのである。その結果、Leona は精神的に崩壊し、Rufus は彼女への罪の意識と自身の黒い肌に対する嫌悪、そして彼の親友であるものの白人男性である Vivaldo に頼ることのできない孤独から、凍てつくハーレム川に身を投げ、入水自殺をするに至るのである。

親友の死後、Vivaldo は Rufus の妹の Ida と交際を始めるが、そこには白人男性側の抑圧された罪の意識がある。Rufus の死体が見つかった後、彼の家へと訪れた Vivaldo は、Rufus の家族とその場に居合わせた黒人たちから、まるで白人男性である彼が殺したかのような目つきで見られているように感じる。その時、Vivaldo は Ida を腕の中に抱きしめ、彼女のそうした眼差しを彼の口づけによって拭い去りたいと感じている。つまり、彼は Rufus の死に関して無罪であることを証明するために、Ida と付き合うことになるのである。しかし、彼女の存在がむしろ Vivaldo に罪悪感を常に呼び起こすことになる。彼女は Vivaldo に、アメリカ白人たちがいかに黒人女性も黒人男性のことも性的に搾取しているのか、また Rufus が白人であったならば死ぬこともなかったと述べるが、Vivaldo はそうした現実を直視することが出来ない。というのも、白人である彼もまた黒人に対するエロティックな幻想を否定しがたいほどに抱いているからである。彼は若い頃、ニューヨークのハーレムに行き黒人の売春婦たちを買うということをしていたし、また軍役に就いていた際に、他のアメリカ黒人と一緒にドイツの女性に自分たちの男性器を見せあうことによってお互いの男性器を盗み見るということをしている。しかし、Vivaldo はそうした黒人に対する性的な幻想を持っていることを認めることが出来ない。というのも、もしもそうしてしまえば、彼は Ida が黒人だから性的に魅力を感じているかもしれない事実と向き合わなければならなくなるからである。それに加えて、Vivaldo はヘテロセクシュアルな

研究成果の概要 つづき

白人男性であることを強いられる環境で育ってきたために黒人男性に対する性的な興味を抱いていることを認められないのである。したがって、そうした現実と向き合わないために、Vivaldo は肌の色など関係なく、人間はみな等しく平等であるという見せかけの民主主義を掲げ、彼の心の闇の奥で発酵し、腐臭を放つ欲望に蓋をするのである。しかし、Ida は彼のそうした言葉が嘘であることを見抜き、彼がアメリカにおける黒人たち——彼女自身も Rufus も含めて——の現実と向き合おうとしないために、Vivaldo のことを愛することが出来ないのである。つまり、Ohi が主張した Vivaldo の言語化できない秘密とは、黒人に対して否定しがたいほどに抱いているエロティックな幻想である。Another Country が描こうとしている問題とは、Vivaldo が自身の心の奥底にある欲望と向き合い、Rufus は白人によって殺され、Ida は白人男性によって性的に搾取されているという現実を直視しなければ、Ida を人として本当に愛することもできず、またそれによって彼女も彼の事を愛することが出来ない、ということである。

こうした問題に対して、Baldwin がどのような解決策を示しているのかというと、キャラクターの一人一人が自分の心の中にある最も隠したい部分、つまり秘密を、相手にさらし合うことである。そうした告白の場面が Vivaldo と白人男性 Eric との性行為である。Eric は南部出身の白人で、過去に Rufus と恋人関係にあった人物である。黒人文学研究の権威である Robert Bone は、同性愛を救済に結び付けていることを疑問視し、白人至上主義を同性愛優位にすり替えていると批判したが、同性愛それ自体が Vivaldo を救済に導いたわけではない。むしろ、Eric との性行為を通して、Vivaldo は一時的にヘテロセクシュアルな白人男性というアイデンティティの外側へと出ることで、人種やジェンダー、セクシュアリティなどのカテゴリーが混じり合い、タブーなどが解除されるカオスの中へと入り込み、Eric、Rufus、Ida へと自己同一化することを通して、Vivaldo は自分自身の心の奥底に沈殿していた彼の黒人に対するエロティックな幻想、罪の意識や恐怖、そして不安などと向き合うことで救済に至っているわけである。Vivaldo は、男友達から恥辱を受けたというトラウマ経験から、同性愛行為を唾棄すべきものと考えていたが、Eric との性行為ではそのようには感じないため、彼はどんどんと Eric が何を考え、何を感じているのか考えようとする。そうすることで、彼の抑圧されていた欲望が表面化してくるのである。彼は、Eric と Rufus との性行為を想像し、それは今現在 Vivaldo と Eric が行っているようなものだったのかと心中で自分自身に問いかける。また、肛門性交の際には、Vivaldo が女性の位置を占めることになる。その場面では彼は Ida との過去の性行為を今現在のそれと重ね合わせ、Eric の中に Ida と性行為をする自分の姿を見ることで、Vivaldo は Ida の視点と同一化するのである。こうして、人種もジェンダーもセクシュアリティも時間も全て越境しながら、Vivaldo は様々な人物の視点と同一化し、彼ら、彼女が一体何を考えていたのか自分自身の経験から想像することで、その想像の中に映し出された自分自身と向き合っているのである。

また、Ida も Vivaldo に今まで彼女が隠していたことを打ち明けることになる。彼女は Rufus の死後、白人への復讐のために歌手になることを決心し、そのために有名なテレビプロデューサーである白人男性の Ellis と関係を持つことになる。彼女は黒人女性のステレオタイプである売春婦という役を演じることによって Ellis を利用しようとするが、彼女が予期せず抱いた Vivaldo への愛情のためにその計画が頓挫することとなる。というのも、Vivaldo の存在によって、Ellis との関係が彼女にとって耐えがたいほどに醜悪になるからである。しかし、Rufus を死に追いやった白人の一人でもある Vivaldo に対して、愛を抱くことに困難を覚え、さらにそれを表現することもできない。彼女の唯一の望みと同程度の恐怖は、Vivaldo が彼女と Ellis との関係を見つけ出し、それを止めさせることであったが、先ほど確認したように Vivaldo はそうした現実から目を背けようとするために、一層彼女は彼を愛することが難しくなるのである。しかし、テキストの最後の方で、Ida は彼に彼女がやってきたことを全て打ち明けるのである。それは、彼女の愛と憎悪の両方を伝えるためである。

しかし、様々な批評家が指摘してきたように、Another Country は問題の完全なる解決をせずに物語が終わることとなっている。Ida は彼女の秘密を晒したわけだが、Vivaldo は Eric との関係や、彼との性行為を通して理解したことなどを打ち明けることが出来ていない。今後、二人の間に愛が生まれるとすれば、それは Vivaldo が彼女に今まで彼が隠そうとしてきた秘密を告白するときである。しかし、同時に Baldwin はある一縷の希望も描きこんでいる。それは Vivaldo の小説である。今まで秘密から逃げることで書けなかった小説が、Ida の話を聞いた後、書けるようになる。小説の完成はまだまだこれからであり、二人の愛情は凍り付き始め、小説の完成までに二人は幾度となくお互いを傷つけ合うことになるが、これから先、もしも小説が完成し、Ida がそれを読み、Vivaldo の告白を理解してくれたとしたら、そこには愛が生まれるのではないだろうか。このような絶望の淵にある悲しみと、未来に対する一縷の望みとが複雑に混じり合った希望は黒人のブルース音楽、特に“Trouble in My Mind”に歌われる希望のようである。「憂鬱な気持ち。でも、いつまでもそうじゃない。きっといつか、裏口から太陽の光が差し込む日が来るのだから。」Vivaldo と Ida の最後の場面の描写は、彼の部屋の窓から眺める青黒い真夜中の空である。

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文タイトル、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④ 学会発表

1. 2018年度立教英米文学会、2018年12月15日、「James Baldwin の *Another Country* におけるキャラクター関係と *American Innocence*——黒人音楽伝統を手がかりに——」(於立教大学)